

第5回日本放射線安全管理学会・日本保健物理学会 合同大会印象記（12/16～12/18）

藤島かおり
Fujishima Kaori

2024年12月16～18日の3日間にかけて、大阪大学コンベンションセンターにて第5回日本放射線安全管理学会・日本保健物理学会合同大会が開催された（写真1）。

本大会は5回目だが、日本放射線安全管理学会としては第23回学術大会、日本保健物理学会は第57回研究発表会として、それぞれ歴史のある大会の合同大会であり、放射線防護や安全というテーマを、



写真1 会場となった大阪コンベンションセンター



写真2 特別講演等が行われたA会場

学術的な視点から見た保健物理学会と実務的な視点から見た安全管理学会、その両側面を一度に知ることができるという一挙両得の大会である。

筆者はこの数年間、放射線管理の業務から離れており、この合同大会に参加するのは2019年開催の第2回大会以来5年ぶりとなった。

開会式の直後に行われた特別講演では、大阪大学の渡部直史氏により「アルファ線核医学治療の現状」と題して、核医学における最新の治療の状況が紹介された（写真2）。新しい放射線利用とそれに伴う放射線防護の課題については他の講演者にとっても興味が深く、続く講演でもたびたび話題に上がり、大会の開始にふさわしい講演となった。

放射線安全管理学会のシンポジウムでは、放射線施設での火災対応として、実際に火災発生時に対応した担当者のリアルな体験談が語られた。火災現場を経験された講演者の実体験や当時の画像も紹介いただき、自施設でも起こりうるという危機感と、もし自施設で起こったときに自分が講演者のように冷静な対応ができるかという不安を抱かせるものだった。しかし、平時から管轄消防署との連携を行っている事例や、防災・緊急対応／危機管理のセッションでは、通常と異なる状況が発生した場合の線量評価や測定方法、その他にも事故に至らなかったヒヤリハットへの対応等様々紹介されて、平時のリスクマネジメントのあり方を考える良い機会となった。

2日目の夕方に開催された懇親会は千里阪急ホテルに場所を移して行われたが、多くの参加者が集い、近況報告や放射線利用のこれからについてあちらこちらで話題があふれていた。

筆者も久しぶりに再会した方や、紹介の紹介で、



写真3 講演後の質疑応答の様子

今までほとんど関わりが無かった分野の方と懇談できたりと、懇親会だからこそ広がっていく人と人とのつながりを久しぶりに実感し、非常に有意義な時間となった。

会期中に日本保健物理学会側の大会長である秋吉優史氏（大阪公立大学）と話をする機会があった。今回は完全対面での開催としたところ、口頭発表もポスター発表も想定以上の応募になったとのことで、多数の応募に大変感謝していると嬉しそうに話をしてくださった。

大会長の言葉どおり、入口まで人があふれるような会場がいくつもあり、更にポスターの発表時間は会場内のそこかしこで議論が交わされる等、3日間を通して熱気にあふれた大会だった（写真3）。

ポスターは2日間合計で71件の発表があり、放射線計測、線量評価や緊急対応、人材育成の他にも医療関係、環境放射能、放射線影響等合同大会ならではの広い分野からの発表があり、興味が尽きなかった。

筆者の勤務先である（公社）日本アイソトープ協会の理工・ライフサイエンス部会の専門委員会で取り組んでいる動画コンテンツ¹⁾についてもポスター発表を行った。

放射線防護のための放射性物質の取扱いについて、文章や図のみでは表現できない作業を動画で紹介して理解を深めていただくことを目的としたもので、日々放射線の安全管理に携わっている参加者の多数の皆さんに興味を持っていただき、発表時間いっぱいまでご質問やアドバイスをいただくことができた（写真4）。

3日目に行われた2つ目の特別講演である早稲田大学、加速キッチン合同会社の田中香津生氏による



写真4 熱気あふれるポスター会場

「中高生の放射線探究サポート「加速キッチン」」や放射線教育の講演では、中高生への放射線教育の取組みが紹介された。昨今の高校生達の知識レベルの高さに圧倒されながらも、生徒たちの熱意に触れ、放射線業界の明るい未来を想像することができた。

中でも国際視点での高度人材育成に関する取組みとしての、国際原子力科学オリンピックへの高校生参加の支援については、日本アイソトープ協会も学術的なサポートを行っており、将来の原子力人材が多数育成されることを期待している。

閉会式では優秀プレゼンテーション賞5名、優秀ポスター賞3名の授賞式が行われた。更に各学会の次の開催地として、保健物理学会からは水戸、放射線安全管理学会からは京都の開催案内が行われた。次回はそれぞれの独立した大会となり、各々の学会の特色が際立つ大会となるだろう。

このように、合同大会と個別大会を隔年で開催する方法は、広い情報交換と専門的な学術研究成果の発表が繰り返し行われるので、研究者の切磋琢磨につながり、情報を広く深く求めている参加者にとっても非常に有益なものである。

事務局の大変さは脇に置き、参加者としてはこれからもこのような開催方法を継続してもらいたいと願っている。

参考文献

- 1) 「動画による放射性物質の安全取扱いと放射線防護」 <https://www.jrias.or.jp/report/cat1/314.html>



((公社) 日本アイソトープ協会)